



2012. 12. 7

創業50周年記念、思い出をたどる(3)

▽現山中オーナーの時代にー1984年(昭和59年)5月31日
大阪出身で三代目になる山中崇裕(ヤマカ たく)は、学生仲間と学生相手にスキーバスツアーを催行する旅行会社をつくり大儲けして天狗になっていた。父親から「どうして、お前の鼻は上に向くのや」と、たしなめられたこともあり、自分を試すために海外に出ることになった。友人と二人旅の予定が一人旅になり、イギリスを手始めにヨーロッパ各地を転々とする。が、どこの食事もうまいとは思わずにいたところ、イタリアで初めておいしい料理に出会った。それが後々、イタリアンのオーナーへ結び付くこととは、想像もしなかった。

「武者修行」から帰国した24歳(1979年)から当店に勤務。その後、大阪のホテルやレストランなどで働きながら独立をと考えていたある日、なつかしさのあまり「ピノッキオ」をのぞいたところ、偶然にも、以前お世話になったオーナーが、閉店する積もりで店内を整理中のところだった。そこで、そのまま譲り受けることとなるが、その時山中29歳。50年前の創業日が判明せず、50周年を機会にこの譲渡契約日を創業記念日と定めることになった。

▽譲渡を受けからもぼうずの毎日ー

一時休業していた店ゆえ、看板を替えて新規開業をすれば、当面はご祝儀で儲かるのが普通だが、歴史ある名前を引き継ぐことにした。ところがぼうずの毎日。自分のポケットから1000円を割いてその日の売り上げを取り繕うことも。つり好きの山中だけに「ぼうず」を嫌ってのことだった。

▽阪神・淡路大震災で被災ー1995年(平成7年)1月17日

ご多分に漏れず店内はゴジラが暴れまわったかのごとくめちゃくちゃ。社員は郷に帰らせて店内の後片付けをするうち、局舎が壊れたNHK神戸放送局のテレビの静止画面を見たお客さまから、「あの画面の横にピノッキオがあるはずだが、大丈夫ですか・・・」などと激励電話が入り始めた。留守電のメモリーがいっぱいになる中、どこの誰かは分からないが、全国各地にお客さまがおられたことを実感する。その電話も数日後には「お前とこのピザ、食べたいねん・・・」「おい、はよう開けるや・・・」などというお叱りの言葉に変わってきた。やる気も失せていた山中は、それらの声に押されて再開を決意。24日間休業の後、なんとか2月10日に再開を果たした。水は給水を受けて運び込み、釜はプロパンに切り替えたが、下水道が破損されていたために、隣接のジェペット店で再開。しばらくは近くの広場で、無償で被災の方々へ食事の支援を続けた。

▽「がんばろう神戸」が誕生ーこの年2月

この春、オリックス・バファローズがユニフォームの袖につけたワッペンが、山中が旧知のオリックス球団猿渡敏男社長(当時)との相談のなかで誕生することとなった。それが奏功したのかその後のチームは快進撃。オリックスとしては初の、球団として11回目のリーグ優勝を果たして、復興に立ち上がる市民を勇気付けることになった。観客動員も球団新記録の165万8千人を、また翌年は、巨人を破り日本一になり、179万6千人と記録を更新した。

「がんばろう神戸」は3年間、その後「がんばろうKOBÉ」になり、通算4年間活用された。イチロー選手が数々の新記録を重ねたのもこの頃だ。

▽村上春樹「うずまき猫のみつけかた」に登場ー1996年(平成8年)5月

村上春樹さんの幼少は西宮・芦屋で、神戸高校での3年間を神戸で過ごしたこともあり、震災の年9月××日、自作朗読会開催のために芦屋と神戸を訪ねた。その時、被災地を歩かれていて、「海岸近くの<キングスアームス>も、ピザを食べたくピノッキオも残っていた」と無事を確認して本に書かれている。

▽同じく「神戸まで歩く」にも登場ー1997年(平成9年)5月19日

阪神・淡路大震災の2年後、西宮から神戸まで2日をかけて歩いた短編の最後のくだりに、「ピノッキオ」へ立ち寄られた場面が登場する。初日に「甲子園球場での阪神・ヤクルト戦を観戦した」との記述からこの日が判明。カウンターに座りビールとシーフード・ピザを食べて、2杯目のビールを飲みながら、「日はまた昇る」の文庫本を読んでいた。山中オーナーによると、「自分がサービスしたはずだが・・・」店のものは誰も気付かず。その番号は「958816」だった。後々、お客さまから「小説に紹介されていたよ」と知らされて、初めて気付くことになる。このご縁で、後々ノーベル文学賞の候補に挙げられることで、毎年10月には吉報を心待ちにすることになる。(続く)



(写真:上記2冊 新潮社刊)